

第5回放課後児童対策に関する専門委員会ヒアリング

神奈川県・保護者

■まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は現在、小学校5年生の一人息子のシングルマザーです。息子が2歳を迎える前に離婚し、実家に戻って生活していますが、父はすでに他界しており、母も70歳を超えております。私自身は、市内にある公的研究機関で、出産前から現在も無期雇用の契約職員として勤務しており、幸いにも安定した生活をおくることができます。

ただ、土日こそ休みとはいえ、業務の都合上、泊りがけの出張や残業もあり、とくに年度末から決算期にかけては21時を過ぎる帰宅になることも多く、保育園も、車通勤で私が送迎する都合上、土曜保育があり、かつ一番遅くまで預かってくれる園を選択しました。息子には、小さいころからさびしい思いをさせていると思います。そのせいか、息子は一人で寝ることができず、私の帰りを遅くまで待つこともしばしばありました。

■つぎに、私たち家族と、学童保育との出会いについてお話しします。

保育園時代は、保育園と学童保育の違いをよく理解しておらず、放課後活動の充実していることを宣伝していた私立小学校と、実家近くの公立小学校であるA小学校とに入学を迷っていたところ、高校時代の先輩から「A小学校は学童保育の指導員がしっかりしているから安心だよ。私立より絶対良いよ！」と助言いただき、「学童保育の指導員がしっかりしていれば大丈夫なのか、ふ～ん。じゃ、家からも近いしA小学校で良いか」というように、学童保育の重要性を知らないまま、A小学校への入学を決めました。

A学童クラブは、現在、1年生から6年生まで44名が在籍しています。保護者会が運営を担っており、施設は小学校の余裕教室を利用しています。指導員は、午前中から勤務の常勤指導員が3名、午後から勤務の非常勤指導員が4名の、常時4名体制で保育を行っています。ちなみに、現在の保育料は1か月2万円で、全国的に見ると高い額だと聞いています。

A小学校は我が家通っていた保育園から距離があったため、保育園からの知人・友人はほとんどおらず、事前の情報もあまり集めていなかったことから、学童保育の入会説明会ではじめて、保護者会運営で、補助金申請、給与計算などの運営に関する業務をすべて保護者で行っていることを知り、衝撃を受けました。

「仕事をしながら、こんな面倒なことができるのか?」「高額な保育料を負担したうえ、さらに役割分担があるなんてありえない!」「子どもが大きくなったら辞めれば良いんだな…。」そんな私の心の声が顔にバッチリ出ていたのでしょうか。説明会に同席していた指導員の先生が、学童保育の成り立ちや保護者や指導員の地道な活動で学童保育を盛り立てていることをわかりやすく説明してくださりました。それまでもやもやしていたものがストーンと心に落ちた瞬間

でした。あのときの指導員のフォローがなければ、私は息子を学童保育に通わせつづけられなかったと思います。

■つぎに、息子が小学校に入ってからの様子をお話しします。

息子は小学校入学当時、「働いていない親がいる家庭」の存在を初めて知り、「なぜ自分は毎日学童保育で親の帰りを待たなければならないのか！ 家に帰りたい！！」と訴えました。保育園のときには、周りの子どもの親も皆、働いていますが、小学生になると、それが「みんな」ではなく、「学校が終わったら、家に帰るとお母さんが待っていてくれる」家庭もあるわけです。そのことに気づいた息子に、学童保育へ通うことの必要性を伝えました。

また、息子は、失敗を恐れるあまり、新しいことにチャレンジするのが非常に苦手だったこともあり、学童保育に入所した当初は友達の輪に入らず、一人で指導員の椅子に座って、子どもや指導員たちの姿を眺めて過ごすことが多かったと聞いています。このことは、指導員が日々、書いてくれる連絡帳を通じてや、お迎えに行ったときに指導員から伝えてもらっていました。「今日、学校であったこと教えて？」と息子に聞いても、「忘れた！」の一言で、息子の学校生活をまったく把握できない日が続きました。

そんなとき、学童保育に迎えに行った際に、「毎日の出来事をまったく教えてくれず、『忘れた』の一点張りなんですよ」と愚痴をこぼしたところ、指導員の先生は「子どもの一日は大人の日より、ものすごく長くて、そこへもってきて、毎日新しいことを覚えているから、小学校で起きた出来事は放課後に遊んだら上から積み重なって忘れちゃうんだよ。そして思い出すのが面倒だから『忘れた！』で済ませるんだよね～」と笑顔で教えてくれ、「そうだよ。毎日、毎日いろんなことがあるから、今日習った漢字なんて忘れちゃうよね！」と笑いあったものです。

これも、毎日の積み重ねのなかで、子どもたちを見守ってきた指導員がいるからこそ、親に伝わるものだと思うのです。息子の個性をいち早く見極め、長い放課後にいつまでも寄り添ってくれたのは、私や祖母ではなく、指導員でした。そんな息子も徐々に環境に慣れ、すぐに「学童大好き！もっと遊びたかった、迎えに来るのが早すぎ！」という子どもになりました。

学童保育にお迎えに行くと、指導員の背中がカメのように、いつも誰かがおぶさっていました。「大変ですね！」と声をかけると指導員は、「子どもたちは学校や社会のなかで、大人が思う以上に、毎日一生懸命がんばっていて、どこかで思いきり甘えられる場所を求めているのよ。でも、彼らも指導員を思いやってくれて、『〇〇は腰が悪いんだから、あんまり乗っかるなよ！』なんて言ってくれるのよ」と笑って答えてくれました。それを聞いて私は、おんぶや抱っこをしながら息子の話を聞くようなことは久しくしていないと反省すると同時に、学童保育は子どもたちにとってなくてはならない放課後の居場所なのだと認識しました。

■ところが、秋になってからのことです。

「お腹が痛い」「頭が痛い」といって保健室に通う日が増えました。「今日も保健室行った」

と報告を受けたり、小学校から「熱があるので迎えに来てください」と連絡をうけ、迎えに行くと病院に行くほどの症状は出ておらず、家に帰ると元気回復という日が続き、私は悩みました。

学校に確認しても特段のトラブルもなく、心当たりもないとのこと。「さて困った…」と思い、指導員にも学童保育での様子を確認したところ、「入学当初のように、お気に入りの椅子に座って、一人で学童保育のなかを見渡してぼーっとしている時間が増えたのが気になっていた」とのこと。「学童保育でも気にかけておきます」とおっしゃってくださったことで悩みを共有できたと安堵したものです。

その後、指導員が機会あるごとに息子に寄り添ってくださり、息子が思っていることやなかなか言葉にならない気持ちをていねいに聴きとってくれたおかげか、息子もすっきりしたようで、次第に腹痛・頭痛を訴えることもなく、いつも通りの日常生活をおくれるようになりました。

親である私は、原因を探り、問題を解決することに躍起になってしまい、息子が思っていることや彼の気持ちに寄り添うことを見落としていたと気づかされた一件でした。

■つぎに、指導員についてお話しします。

私は、1年目から保護者の誰もが敬遠する会計を担当したことで、運営の大変さだけでなく、指導員の仕事内容が多岐にわたっており、専門性の高い職種であることを早い段階で知ることができました。

保護者会運営の学童保育では、子どもたちのために指導員を雇用しつづける必要があるのに、児童数の増減によって保育料収入が安定せず、経営難の学童保育も少なくありません。そのようななか、「指導員は子どもと遊んでいれば良いだけだから、資格不要、待遇アップ不要」という意見が多いことも耳にしますが、私はそうは思いません。

子どもたちの気持ち、考え方、行動などがどのようにあるのか、障害のある子どもについて、障害についての知識だけでなく、一人ひとりにどのように関わればよいのか、周囲の子どもたちと関係を築くことをどのように支えるのかなど、勉強を積み重ねていないと、子どもたちの変化や成長に合わせた対応はむずかしいと思うからです。

乳・幼児期と違い、小学生は児童期から思春期に変遷する時期であり、年齢とともに心も体も大きく成長するため、年齢・性・環境などが大きく影響してきます。学童保育は「年齢・性・環境が異なる児童が、それぞれ安心できる放課後を過ごす」場所でなければなりません。そして安心できる環境とは日々の生活において適時適切な判断ができる指導員が存在してなければ成立しないと思います。

私たちの学童保育では、経験豊富な指導員が継続して勤務しつづけてくれた甲斐もあり、保護者会活動が活発です。季節の折に子どもたち、保護者だけでなく卒所生も交えた行事が開催されます。夏のキャンプには、中学生から社会人までの卒所生も参加してくれ、初めてのキャンプで戸惑う保護者に代わり、彼らは掴み取った魚を串に刺すまでの作業を子どもたちにつきっきりで教えてくれたり、水遊びなど常に子どもたちと一緒に遊んでくれました。兄弟でもない、見ず知らずの子どもたちを思いやりを持った大人に成長させてくれる場所がどこにあるのでしょうか？ この学童保育に息子を通わせることができ、本当に良かったと思うと同時に、

「A小学校の学童保育良いよ」とアドバイスくれた先輩に感謝しました。

現在では、息子も小学校5年生になり、自我が芽生え、自分の意見もはっきり言うようになりました。一方で親の帰りを寝ずに待つ、さびしがりなところは変わっていません。学童保育だけでなく、高学年になり授業数が増え、習い事も増えたことから、学童保育を休む日もありますが、学童保育で自由気ままに過ごせる時間が、息子にはリラックスタイムになっているようです。

指導員は、今の子どもだけでなく、「かつて学童保育に通った子どもたち」のよりどころにもなっています。進路、家族、友人とのかかわりなど、親には相談しにくいことも、小さいころから自分たちのことを見守りつづけてくれた指導員が良い相談相手になってくれるのです。悩みを相談している彼らを見て、将来の息子の姿が重なりました。いつか息子が岐路に立ち、悩んでいるときは、彼らが息子に親身に寄り添ってくれると思い、学童保育がかけがえのない場所であることを気づかされました。

* * *

今回、この機会をとおして、私が保護者として皆さんにお伝えしたかったことの要点をくり返させていただきます。

■1つ目、私たち家族にとって、学童保育はなくてはならぬものであり、私たちはA学童クラブの指導員や、子どもたちに支えられて、働きながらの子育てができていくということです。とくに、学童保育での子どもの様子が、連絡帳や保護者会、お迎えの際など、折々に伝わってくることは、私にとって、大きな支えになっています。

■2つ目は、学童保育には、子どもが信頼でき、安心して共に過ごすことのできる指導員が絶対に必要だということです。すべての学童保育で、A学童クラブのように、専門的な知識と技能、子どもたちや保護者から信頼される資質を持った指導員が、常時複数配置され、継続して子どもと関係をつくっていけるようにしていただきたいと思います。

■そして3つ目、先にもお話したとおり、A学童クラブの保育料は、月2万円ですが、現在、私たちの行政への働きかけや行政の努力もあって、減額に向けて舵を切ろうとしています。これまでの間には、保育料を負担できず、退所せざるを得なかった家庭もありましたし、そもそも利用をあきらめた家庭もあると思います。また、かつては、保育料収入が指導員の給与に影響を与えたこともあると聞いています。

「学童保育を必要としている家庭の子どもが、必要としている期間、経済的な理由に左右されることなく、通いつづけることができるようにすること」「保護者や子どもが信頼できる指導員を、安定的に長期的に雇用することができるようにすること」を実現できるような、制度の充実を求めます。